

発表した結果の要点を簡潔にまとめて表としたものである。

(芝 哲夫)

[思文閣出版, 〒606-8203 京都市左京区田中関田町 2-7, TEL. 075 (751) 1781, 2009年9月, A5判, 400頁, 2,500円+税]

石井拓男・渋谷 鉦・西巻明彦 著 『スタンダード歯科医学史』

私は「歯科医学史」については門外漢であるので、本書を十分に紹介できるかどうか心もとない思いであるが、30年以上に亘って門前の小僧として歯科大学に勤め、医療倫理の歴史を研究の対象にしてきた。そのため、歯科医学の歴史には関心があったので、本書の紹介を引き受けた次第である。

本書は、日本歯科医学学会会員の著名な3教授が各々専門の立場から、歯科学生を対象にして著した啓蒙的な入門書である。世界と日本の歯科医学の歴史が平易な言葉で説明されており、初心者や歯科学生にとっては歯科医学の全容の歴史を知る上で有益な書籍である。

まず、本書を全体的に眺めると、写真が豊富で、重要な語句の解説も適時に施されており、特に歯科学生にとっては興味深い構成と思われる。平成22年度より歯科医師の国家試験の「必修の基本的事項」の中で「医学史、歯科医学史」が出題範囲として取り入れられている。今後、先人の叡智を知ることの有用性から共用試験(CBT)にも出題される可能性が考えられる。また、歯科学生が「歯科医学史」を知るとは、歯科医学の本質や目的を学ぶことになり、本書はその手がかりを提供してくれる重要な入門書であると思う。

歯科医学の歴史は古いが、体系的な「歯科医学史」の書籍が登場するのは昭和6年7月に発行された川上為次郎著の『歯科医学史』ぐらいである。現在、その歯科医学史は科学書院から影印本として復刻されているが、古い言葉や漢字が使われており、若い初心者の歯科学生が興味を抱くような歴史書ではない。他にも若干の先行の歯科医学に関する歴史書が出版されているが、体系的学術的

に構成されていない。それに対して、本書は歯科医学を勉強する読者にとっては、先人の豊かな叡智や歯科医学の全体的な流れを容易に知ることができる書籍である。しかし、本書の性格から専門家が研究資料として利用するには情報量が少ない。

本書の『スタンダード歯科医学史』は写真による資料が豊富で、構成も歯科学生が関心を持つような心遣いが随所に見られる。最初に、本書は日本と世界を対比した「歯科医療の歴史略年表」が11ページに亘って示され、その下部にはカラーによる関係資料が多数配置されているのも特色である。そのため、初心者や歯科学生は、まず視覚と合せて「年表」から歯科医学の情報を得て、概略史を知ることができるので、内容が理解しやすい構成になっている。

本文は2色刷りで、左側には関係する簡単な解説と多くの写真が配置されており、文章も簡潔である。内容として、各章を目次から示すと、1 古代の歯科医学史、2 中世の歯科医学史、3 ルネサンスの歯科医学史、4 ルネサンスから近代の歯科医学史、5 フォージャーとアメリカの歯科、6 解剖学の歴史、7 外科学の発達、8 麻酔法と消毒法の発見、9 歯科医学に貢献した発見・発明、10 江戸時代までの日本の医療制度、11 日本の医学の発達と蘭学の受容、12 江戸時代の歯科医療文化、13 日本固有の義歯と口腔ケア、14 西洋近代歯科医学の導入、15 歯科医師法成立から厚生省発足まで、16 戦後の歯科衛生士法誕生と歯科大新設ラッシュ、17 戦後の歯科医学教育にかかわる制度の変遷、18 公衆歯科衛生のあゆみ、となっている。これらの章の最後には、「まとめ」が簡

潔な箇条書きで示されているのも、歯科学生が歯科医学の歴史を理解するのに役立つと思う。

本書の意義をまとめると、本書自身に価値があることと共に、歯科学生にとって有用な入門書であること、研究者のための一里塚なること、歯科医学の発展のために努力してきた先人の叡智の道がわかること、歯科医学の流れを容易に知ることができること、などである。

古代から近代までは歯科医学の資料が少ないために、医学史が中心に書かれているように見えるが、歯科医学は医学の一部として説かれている。18世紀以降は、日本における歯科医学の歴史が中心で、歯科医学の日本への移入史や歯科医学教育史や公衆歯科衛生の流れなどが詳しく説明されている。

日本の近代医学の出発はドイツ医学の採用にあったが、近代歯科医学の出発はアメリカの歯科医学を範にしている。医科歯科一元論・二元論の

見解や新設の歯科大学が多数出現した背景、現在の歯科医学教育に共用試験システムが導入されたことなどの経緯が、当時の社会情勢と絡んで示されている点も具体的でわかり易い。そのため、容易に今日に至るまでの歯科医学の全容を知ることができるので、歯科学生に限らず歯科医師の先生方にも大変有用な役割を提供してくれると思う。

本書の最後には、「人名索引」、「書名索引」、「一般（語句）索引」が付いている。これも歯科学生が国家試験やCBTの試験の準備にも役立つので、歯科大学で教師をしている者として評価したい。なお、目次には、項目ごとに担当された石井拓男氏、渋谷敏氏、西巻明彦氏の氏名が付され、責任の所在も明らかにしている。

(関根 透)

[学建書院, 〒113-0033 東京都文京区本郷2-13-13,
TEL. 03 (3816) 3888, 2009年10月, B5判, 115頁,
3,500円+税]

石井拓男・渋谷 敏・西巻明彦 著 『スタンダード歯科医学史』

我が国において、歯科医師が独立した免許を持つ職種となったのは、1906年であり、今年で104年経過したことになる。これまで、歯科医学史の教科書として出版されたもので現在入手可能なものがなく、各大学では、担当者が独自のテキストを用いて教育を行ってきた。この度、石井拓男教授らにより、初めて「歯科医学史」が刊行されたのでここに紹介することにした。

本書は、2007年に改訂された「歯科医学教授要綱」の内容に基づいて構成されており、次のような目次となっている。

1. 古代の歯科医学史
2. 中世の歯科医学史
3. ルネサンスの歯科医学史
4. ルネサンスから近代（フォシヤール以前）の歯科医学史
5. フォシヤールとアメリカの歯科

6. 解剖学の歴史
7. 外科学の発達
8. 麻酔と消毒法の発見
9. 歯科医学に貢献した発見・発明
10. 江戸時代までの日本の医療制度
11. 日本の医学の発達と蘭学の受容
12. 江戸時代の歯科医療文化
13. 日本固有の義歯と口腔ケア
14. 西洋近代歯科医学の導入
15. 歯科医師法成立から厚生省発足まで
16. 戦後の歯科衛生士誕生と歯科大新設ラッシュ
17. 戦後の歯科医学教育にかかわる制度の変遷
18. 公衆衛生歯科のあゆみ

本書は前半で、諸外国における歯科医学の歴史を時代区分に従って述べ、後半では我が国における歯科医療・歯科医学の発達の流れをたどって記